〈質疑応答〉

司会　会場からの質問を受けます。

会場　『住山記』の価値や研究意義はどのようなものでしょうか。

尾﨑　まず、門派や地域の展開の研究に有効です。派についていえば通玄派が圧倒的です。大雄山の最乗寺の系統や私の寺も通玄派です。これ以外は、寒岩派は少なくても影響力は強かったです。時代、地域、活動形態の様子は充分研究されていません。現在の派の動向よりも、江戸時代の曹洞宗の勢力関係がわかってきます。住職の派の違いも『住山記』から読み解くことができます。現在は派を意識しませんが、寺によっては系統を話す場合があるので、派の考え方は生きています。

会場　現在、曹洞宗において派の動向は意識されますか。

納冨　それは学問的に必要で、生活上ではさほど関係ありません。先般、東北の人と会いました。「私の寺は明峰派だから肩身が狭い」と言いましたので、最近の禅師は明峰派が多いと言っておきました。慶長以降、徳川幕府は本末制度を作り、寛永九年各宗本山に本末帳の提出を要請しています。まとまってあるのは延享・天明・文化年間の三種類ですが、曹洞宗は一七、〇〇〇から一八、〇〇〇ヵ寺ありましたが、總持寺の末寺は、約一六、〇

○○から一七、○○○ヵ寺あり、その九十五％以上を占めていました。永平寺末は、大乗寺、宇治の興正寺、肥後の大慈寺とその派下の寺院で、合計しますと、一三七○～八七三ヵ寺で五％前後です。また總持寺の瑩山門流でも、明峰派、峨山派などがあり、峨山派のなかでも太源派・通幻派・無端派・大徹派・実峰派に分かれ、またそれぞれが再分派して全国的に展開し、現在の曹洞宗教団が成立していますから、曹洞宗の研究をするためには門派は無視することはできません。

司会　納冨先生の最初の論文は、鶴見大学仏教文化研究所の紀要第四号の「總持寺『住山記』について」です。二百二十六世まで克明に報告されています。これは『住山記』と関係資料との対比です。その後、尾崎先生が論文を発表されています。峨山禅師が輪住制度の確立と教団発展に貢献されたと思いますが。

納冨　峨山禅師が總持寺の輪住制度を確立していますが、輪住制度の基は永光寺にあります。しかし、不完全だったので峨山禅師がより強固にしました。この輪住制度は、峨山門派の拠点寺院にも導入され、団結と発展がはかられています。そのなかで、明治維新前に輪住制度を廃止した寺院は、十五ヵ寺あります。永光寺（石川）、正法寺（岩手）、永澤寺（兵庫）、竜泉寺（福井）、退休寺（鳥取）、永祥寺・洞松寺（岡山）、玉林寺（佐賀）、福厳寺（愛知）、禅林寺・慈眼寺・宗生寺・願成寺（福井）、悟真寺（熊本）、護国寺（大阪）です。

明治維新まで持続したのは十三ヵ寺です。竜沢寺（福井）、大洞院（静岡）、最乗寺・大慈院・報恩院（神奈川）、洞慶院（静岡）、泉福寺（大分）、泰雲寺（山口）、竜渓院・泉竜院・長興寺・乾坤院（愛知）、石雲院（静岡）です。

また大洞院は普蔵院に六十数回輪住していますが、大洞院自体は一回も輪住せず、全部、末寺の住職に代住させています。それは大洞院自体が輪住制でしたから、普蔵院への輪住が不可能だったからでしょう。また大河ドラマ「天地人」でも有名になりました雲洞庵も、慈光寺（新潟）の輪住六回を全部代住しています。

司会　『住山記』はどのように記録されたか、その様子や方法は。

納冨　下書き、覚え書きがあったようです。能登の祖院に『住山記』が七、八冊残っています。全く同一のものもあるし、下書きらしいものもあります。總持寺のものはきちんと書いてありますが、祖院の方は、成直（なりなおし）（永平寺に瑞世したものが、多分總持寺系寺院の住持になるためと思われますが、再度總持寺に瑞世すること）などは挿入してありますが、總持寺のものは普通に書かれています。だから、總持寺のものは清書したことがわかります。

司会　住持名がない人がいるということですが、尾﨑先生の発表でも世代名がない箇所が多いとありましたが。

尾﨑　見本をお見せすれば良かったのですが、派の横に数字があります。数字は完全に続き番号であります。しかし、瑞世師の名前がありません。年と月と日があって、そこだけが空欄の場合もあります。何世で何日という定型は最初に書いてあり、そこに穴を埋めるかのように、瑞世師名と日にちを入れたと思います。それが事情で埋められなかった。瑞世師が何人もないのは、元帳が痛んでいて書写できなかったと考えています。

会場　活字化した理由は。

納冨　この『仏教文化研究所紀要』で第一号だけを活字化しましたが、それはネガがだめで、紙焼きしても読めなかったから写真本も作成できなかったためです。

司会　最後に木村所長、お願いします。

木村　本日は長時間、納冨先生、尾崎先生にご講演いただき、シンポジウムにもご参加いただいて、熱心な討議、討論が行われました。会場の皆様にも長い間お付き合いいただきありがとうございました。仏教文化研究所は仏教の思想、文化を研究の中心にしています。しかし、思想や文化を支えるのは社会経済史的な仕組みであり、その部分もしっかり押さえていかないと、実態はわかりません。今回はご移転の因縁に因み、熱心に解読を進めていただいたお二人の先生を中心に、『住山記』に関わる発表と討論をしていただきました。『住山記』は、ほぼ六百年にわたる資料です。しかも欠落がほとんどありません。總持寺を拠点として、中世から近世にかけて、曹洞宗教団のあり様は全体としてどうであったのか、さらにそこで実際に行われていたことや、教義の問題はどうなっていたのかなどは、これからの課題です。今回の成果をベースにして、それらの課題にも取り組んでまいります。そして、永平寺と總持寺、二つのご本山を核に置く宗門の、受け継ぐものは受け継ぎ、改めるべきは改めて、更なる発展につなげていきたいと願っています。本日はありがとうございました。

司会　データベース化にはまだ時間がかかります。ご移転百年の記念事業としてご本山から出版されます。以上で終了いたします。ありがとうございました。